

第四章陸戰に關する國防地政學、第五章海洋作戦に關する國防地政學、第七章空戰に關する國防地政學を考究せられ、第六章は大東亞戰爭の地政學的意義を述べて、亞細亞大陸と太平洋との「産靈」たる日本の使命を明かにせられてゐる。之等の勞作から匪々にして興味ある洞察を見出す事は讀む者の喜びである。慾を言へばその數多い圖版が、例へば上海の英文雜誌「第二十世紀」からの轉載であつたりして、獨自性に乏しい事は内容をそれから推し計られる危険があるが故に惜しまれる。然し乍らその圖版の豊富さと在來の地政學者の混迷せる文章を排しての平明な記述は喜ばしい事である。

以上、地政學と戰略學とを關聯づけた最初の纏つた本として紹介の拙筆を走らせた次第である。(昭和十八年六月、帝國書院發行、A5版、四二五頁、賣價五圓)(村上次男)

漢三國六朝紀年鏡圖說

京都帝國大學文學部 第一冊 梅原未 治編著  
考古學資料叢刊

支那古鏡鑑が、その勝れた、又特異な造形性の故に人々の注意を惹き、殊に又、それが我國上代の考古學的的研究に取つては特殊な關係に立つ事が本邦學者の特に強い關心をよび起して、こゝに觀賞を越えた科學的な研究が我國學者の手によつておこされ來つた事は、こゝに改めて述ぶるまでもないところであらう。而して或は美術工藝品として齎らされ、或は我古墳より發掘し出された數々の鏡の内にあつてその研究に最も確實なる基礎を與へるもの

は云ふまでもなく遺品自體に年記を持つ紀年鏡に外ならないが、それは又單に鏡鑑の歴史を考へる上に於いて根本資料たるにとゞまらず、鏡をめぐるとしての問題の考究が、そこに根本的な足場をもつてあらう。従つて紀年鏡の集録が果すべき役割は甚だ大きいものがあると言ふべきである。

編者は先にかゝる意圖にもとづいて「漢三國六朝紀年鏡集録」なる一書を公にされたが、其後續々加はる新資料は六十面を超え、その總數は百三十面以上にも達したので、こゝにすべてこれらを集録して新に圖說を編み、研究に基礎資料を提供されたのが本書である。

さて、本書は、序說、各說、後編及び附說よりなるが、各說には漢、魏、吳、六朝の各期のものそれ〴〵三八・八・六二・二四面をあげて圖版を對照的に解説が加へられてゐる。もとより鏡鏡については最も知見の豊かな編者が、その多年の經驗にもとづいて各鏡にわたり圖像的特色や鏡體の構造、殊に目立つた差違點などを指摘される行文の間に我々は自然に我々自身の觀察眼が教導されて行くのを覺える。そして、鏡銘の解讀には常に新な檢討が加へられて、前考や舊文に改訂を加へられた點も多いが、この場合、新資料多數の加はつた今日の知見に基いて、相似た時代のものに通じた特性を十分確實に把握すること、換言すれば、鏡作の全體に於ける動向の見通しを多數例の内から確實に導く事によつて再檢討が絶えず行はれてゐる。従つて鏡式發展についての見解乃至その再吟味が各鏡解說の内にあつても強く盛られてゐる。

るのであるが、その成果は後説に於いて極めて明快に要を盡されて居り、従つて又我々は本書が集録であり、圖説であると共に、又それは最も確實な史料に基いた鑑鏡史であると云ふ事が出来る。(尤も紀年鏡例を持たなかつた鏡式にあつては當然こゝに論及されなかつたが故に、その點、十分注意の拂はるべき事は編者の指摘してあるところである。)

なほ、この外、同範鑄出にかゝる二鏡例の著しい事實や鑄鑄品に對する考慮等致へらるゝところが多いが、就中最も我々の注意をひくのは附説たる紀年鏡贋作についての一項である。即ち、ここでは贋作技巧の各種のものについて、夫々にその識別點を論ぜられてあるが、研究の進むにつれて贋作も又いよく巧妙に、且つ合理的になり來つた事を知る時、我々は如何に『目』を養ふ事が必要であるかを痛感する次第である。そして又編者が警告するゝ如く、とかく研究法には一つの型が出来上り易いものであつて、例へば紀年鏡が極めて重要であると言ふ事になれば機械的に型通りにたゞ鏡例を求める一方と云つた無批判な方法が取られ易い危険、殊に支那考古學の負つてある不幸を併せ思ふ時、我々はこの危険を一層身近かに感するのである。

なほ編者は卷頭に於いて從來、發掘調査による資料の重要性のみが公式的に取りあげられ、他はそれが遊離したる遺物であると言ふ見地にこだはつて、全く閑却され勝ちなる弊を指摘し、好事家のなる蒐集ならばとにかく、是等遺品の最も確實なるものを、而も多數例を求める事によつて、そこに確實な結果を導いて行く

事ができるならば、それは發掘による根本資料の效果をも、より充分發揮せしめるものである事を強調されたが、これら三つの點は單に鑑鏡の事に限ることなく又考古學一般についての重要な警告である事を特に注意したいと思ふ。(桑名文星堂刊、定價貳拾圓、(岡田芳三郎)

### 大和唐古彌生式遺跡の研究

——京都帝國大學文學部考古學

研究報告第十六冊——

末 永 雅 雄

小 林 行 雄 共 著

藤 岡 謙 二 郎

大和平野のほゞ中央に位置する磯城郡川東村の唐古池を中心とする彌生式遺跡は、今から四十年前に高橋健自博士によつて學界に紹介され、夙にその出土遺物によつて學者の注意を惹いてゐたものである。たゞ昭和十一年十二月に、遺跡の中心をなす唐古池が國道第十五路線敷設工事の爲に採土場選ばれ、其の結果、夥しい遺物が發見されるに及び、京都帝國大學考古學教室は、奈良縣當局と協力し、前後三ヶ月に亙る現地調査によつて重要且つ多量なる出土品を採取し得たのであつた。爾來數年間、末永、小林、藤岡の三氏は、各々分擔して此の難澁な整理に當たられ、遂に今回、老然たる本報告を完成されたことは、洵に斯界の慶事であつて、著者等が茲まで運ばれた勞苦の大なるを多とすべきで